

## 第2回総合教育会議 会議録

- 1 日 時 平成27年8月11日（火） 午後3時00分より
- 2 場 所 市役所 4階合同委員会室
- 3 出席者 【構成員】 吉田誠克 市長  
吉村博一 教育委員長  
萱澤昌子 教育委員長職務代理者  
村井善治 教育委員  
田口晴義 教育委員  
土谷尚敬 教育長
- 【事務局】 村上 裕 企画政策部長  
澤井宏実 企画法制課長  
植本由則 企画法制課企画法制グループ係長  
米田和章 企画法制課主任
- 安川盛久 福祉部長  
森村英樹 保育課長
- 寺井正巳 教育委員会事務局長  
巽 正也 教育総務課長  
亀田淑久 学校教育課長  
中本剛史 学校教育課参事  
谷本真弓 教育総務課課長補佐兼庶務係長
- 4 会議の公開・非公開 公開
- 5 傍聴者 なし
- 6 議事

(司会：澤井課長)

ただいまから、第2回大和高田市総合教育会議を開催いたします。

私は、本日の進行を務めさせていただきます企画法制課の澤井と申します。よろしくお願いいたします。

まず、議事に入る前に、先日、この総合教育会議の前段階の会議として開催いたしました、市長、教育委員の皆さんと校長会との意見交換会の内容について、学校教育課のほうから報告をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

(中本参事)

失礼します。学校教育課の中本です。よろしくお願いいたします。

それでは7月24日に行われました市長、教育委員、校長先生方との懇談会について、簡単ではございますが、報告をさせていただきますと思います。

7月24日には、主に学力向上、それから防犯・防災について話し合いがされました。1点

目の学力向上につきましては、陵西小学校、また、片塩中学校のほうから取り組みの説明がありました。陵西小学校からは、まず、若い教員の指導力向上に向けた研修の充実、それから読書活動、少人数授業、ICT授業の取り組みの報告があったように思います。また、片塩中学校のほうからは、30年ほど前の荒れから、日々の生徒指導の大切さ、組織的な対応の重要性、また、陵西小学校でもありましたように、若い教員を育てるための授業公開、習熟度別学習、そして不登校生徒への取り組みというようなことが報告をされていたかと思えます。この2校の話題の中にありましたように、まず、世代間のギャップをどう埋めていくか。この辺の話し合いがされてきたと思います。中には通訳が要るというような、そんな話が出されていたと思いますが、やはり今後、ミドルリーダー、いわゆる40代、中間を取り持つようなミドルリーダーの育成、また、各校での若い世代を育てるときのプロジェクト、そのようなことが大切ではないかな、そんな話がされていたと思います。また、中学校におきましては、なかなか小学校の基礎学力の定着がなされていないというような話があったと思いますが、これに関しましては、やはり幼・小・中・高連携が大事じゃないかと。また、市長のほうからは個人カード等、市役所の中でもそういうような活用をしているが、そのような、やはり引き継ぎ等、そういうことも大事ではないかな、そんな話がなされていたように思えます。

次に、防犯・防災についての話があったと思います。まず最初に、防犯カメラについてということで話がありました。特に香芝市の児童誘拐事件が直近にありましたので、防犯カメラの重要性について各学校現場はどうかというような話がされています。最近、保護者対応の困難さも含めまして、校長先生のほうからは、ぜひ校長室にもつけてほしいというような、そんな話がありましたが、学校としても必要性を感じておるというような話であったのではないかなと思います。また、防災に関しましては、避難所開設ということで意見交換がなされていたと思います。高田西中校のほうからも取り組みの説明がありましたが、やはり、いざ有事のときにしっかり機能するような体制を、やっぱり学校現場でもとってほしい。また、市としても市民交流センターを含め、どう市民を受け入れていくか。それぞれのテリトリーで最大限努力していくというようなことが共通認識されていたのではないかなと思います。

最後に、市長のほうから、今後子育て支援にしっかり力を入れ、高田で生まれてよかった、高田で将来もずっと住んでいきたい、そんな思ってもらえるような高田にしていくように頑張りたいと思う。今後も教育にも力を入れていきたいと、そんなような最後、熱い思いを語っていただいたのではないかなと思います。

甚だ簡単ですが、私のほうからは以上です。よろしくお願ひしたいと思ひます。

(司会：澤井課長)

それでは、会議次第に基づきまして、早速議事のほうに移らせていただきたいと思います。

まず、1つ目の議題、委員の皆さんからのご報告ということで、第1回目の会議、それから、先日の校長先生との意見交換会を踏まえまして、各委員さんの感じられたことをまたお一人ずつ、申しわけないですが、よろしくお願ひいたします。吉村教育委員長から萱澤職務代理人、村井委員、田口委員、土谷教育長、そして、最後に吉田市長という順番でよろしくお願ひしたいと思ひます。それでは、委員長、よろしくお願ひいたします。

(吉村委員長)

報告というようなものはないのですが、感想ということでお許しを願えればと思ひます。

学校教育というのは、やはり我々、一番気になるわけですけども、あらゆる意味で充実ということを考えてときに、学校現場の力にはやはり限りがあるなという思いがします。といいますのは、教育委員会の積極的な支援、例えば人的、それから財的ですね。そういうものがやはりなければ、なかなか学校現場だけでは目的が達成されないのではないかなという思いが最近特にいたします。我々委員としては、やはり身近な教育現場を見つめて、教育

現場から情報を収集し、何をなすべきかという形で教育行政を考えていくのが大きな仕事ではないのかなと。校長先生方のこの間の発言を聞いておりましたが、それから、学校現場を訪問させていただいたときとか、学校現場、現場と接触をするたびにそういう思いが強くなるなという思いがいたします。報告ではありませんが、感想ということでよろしくお願ひいたします。

(萱澤委員)

私も感想ということで、今日までですが、6月に学校訪問を8小学校、3中学校で行わせていただいて、実際に学校を回らせていただいて子供たちの生活面、あと勉強も見させていただいて、3年目なのでまだ全部の把握はできてないと思いますが、子供たちはやはり先生方の指導力によって、学校のあり方というかあらわれているなというのを感じさせていただきました。学校によってすごく違いがあるということも、この間の校長会でやはり感じました。昨日、教科書選択をさせていただいて、昨日はたくさんの傍聴の方がいらっしゃったのでびっくりはしたんですが、それなりの教科書を選ぶということに対してすごく責任を感じさせていただいたというのが率直な感想です。

(村井委員)

総合教育会議2回出席させていただいて、その理解だけではないのですが、学校の先生方、管理職の方が思っておられるのは、多分先生の数をもうちょっと増やしてほしいということが一番思っておられるのではないかと思います。我々教育委員会は、一番最初に私が思うことを言わせてもらったら、やはり子供たちの学力を上げることと体力を上げることが先生方の一番の仕事であると思うのですが、今の先生方の仕事というのはそれだけではなくて、不登校の子供たちを呼びに行ったり、いろいろなクレームを受けたりと、そういうところに非常にパワーがかかってしまって、本来でしたらどれだけいい授業をしようかというところにパワーを使ってもらいたいのですが、そういうところに非常にパワーが行ってしまって、本来、先生のやるべきことが若干やりにくくなっているような、これは大和高田市だけではないとは思いますが、どこの学校もそうなってきた大変ではないかなという気はいたします。やはり学力を上げようと思うと、学校から帰ってからどれだけ子供たちがやれるかということも実際大きなウエートを占めておりますので、どうしても家庭環境の悪いところは学力が低くなっていることは事実でありますし、家庭環境のいいところはどうしても学力が高い。家庭環境の悪い子供の学力を上げるためにどうするかということで補習授業をしたり、いろいろしてもらってても、結局、その子供たちは補修授業に勉強が嫌だから出てこない。じゃ、どうすればいいのかということはある。非常に難しいのですが、親を教育するというようなことはなかなかできないし、だから学校教育、その辺り難しい。ある程度、ものすごく無理だという子供はどうしてもいると思います。もうどうすることもできないという言い方は悪いですけども、保護者は構わないで欲しいという感じですし、子供たちも全く勉強する気もないし、ひどい子供は平仮名も読めない子供もいましたし、だから、成績の中間レベルからちょっと下ぐらいをどれだけ上に上げられるか、そのためにどうするかということになると、若干教員の先生を増やしていただければ上がるんじゃないかなという気は、私は個人的にはしています。

(田口委員)

第1回から感じたことで、毎日感じていて、いろいろなことを感じますが、ことこの教育に関して、そういうことを考えてみたところ、前回の総合教育会議のときに市長からあるべき理念とか、大和高田市の目標であるとか、あるいは自分の思いとか、大和高田で小さい頃からより大きくなるように育ててくれと、こういう思いを感じました。今までにな

い組織のトップからの1つの理念というところを明確に提示していただいたので、今までにない目から、日々いろいろ大和高田の中を歩きながら見ていましたが、どういうふうにしたらみんな好きになってくれるのか、あるいは、子供たちがどうなったら大和高田にずっといたいと思ってくれるのか、こういう、また今までと違う視点というのが、今までになかった感覚で見られたというのは、要するに、そういう理念であるとか目標だとか、上のほうからの明確なお話、あるいはキーワードをいただいたかなという思いがしています。

今後、やっぱりそういうことを実施していくのは非常にいろいろな能力が必要で、もちろんアクションプランを作らなくてははいけませんし、そういった施設を運営していく組織もしっかりしていけないといけないということで、ますます肩の荷が重くなってきたなという感じはします。みんながこういった中で、今までみたいに教育委員会以外にいろいろな市の方々との連携をとれていくというふうに感じています。そこにはやはり、お互いに情報共有していかなければならない。個々の思いだけじゃなくて、こういう会議はそんなに回数はないですけど、日々感じていることに対するいろいろなもの、あるいは、知ったことということの情報共有というものを、本来、教育委員会の中にもう1つ、新しい組織として情報チームみたいなものをつくって、そこで1つの新しい情報の吸い上げ、皆さんの民意の吸い上げみたいなものが出せることでうまくいくのではないかとということで第1回目の総合教育会議を今、そういうふうに感じています。以上です。

(土谷教育長)

私、ある意味行政のほうに籍を置かせていただいております。あまり先生方とのやりとりの、先生サイドの学校の位置にもあるということで、ほんとうに中途半端という表現は悪いですが、両方とも足を突っ込んでいる、そんな位置で日々過ごしているわけですけど、その中でどこで線を引いていくのか、そのあたりをやっぱりこの間から委員さん、市長さんとも一緒に会議の中でより鮮明になってきたのかな。やっぱり割り切るべきところはきちっと割り切っていかなきゃならない。また、だめなものは駄目と言い続けることも必要だなと。私の性格で、それはわかるけれども、これもわかるというような、ちょっと曖昧な部分も自分自身も感じているものがありますが、そんな中できちんと線を引き続けていかなければならないというようなことを思っておるのは、この間以降の動きでございます。

(吉田市長)

ご苦労さまです。お忙しい中、集まっていただきまして。

私も直接教育現場の人に話をするのは前회가初めてで、ずっと言い続けてきた校長会でしゃべらせてほしいというのが実現しました。私なりに一生懸命しゃべったつもりなんですけども、理解をしていただけた人、いただけなかった人も多分おられると思いますし、市長のパフォーマンスだなという非常に冷ややかな目で見られていたという人も確かに中におられます。私はそういうのを的確に感じるタイプですので、まず、校長会の人にお話しさせていただいて、同じところでやっぱりボールを投げたら苦しんでおられる方がおられる。ここは世代間の、私の64歳になった考え方を55歳の人に言うとはある程度理解していただけたと思いますが、30歳前後の人に言うとは立ってる位置が違う。特に市長会で昭和23年生まれから53年生まれまで30歳の年齢の開きで同じバッジをつけた人間が12人います。その会議の中で、我々の世代の当たり前と昭和50年を超えた人の当たり前とは明らかに違います。ですので、今までの市長会というのは、最終的にいろんな意見が出て「せやのう、こうやのう」というのでまとまったんです。「せやのう」というのは同じところに立って、同じ方向を見ているから「せやろ、せやな」と、これでおさまっていましたが、立っている位置も見ている方向も違うという難しさを感じて、校長会でどう校長として管理しておられるのかなと聞いたときには、ミドルリーダー、通訳をつくって、中で経由しても

らって私の考えを浸透するようにやっていますと言われたときには、私と同じところでやっぱり迷っておられる人もいるんだなというのを感じました。そういうので一生懸命やらせていただいて、何かの1つにでもなればという気がしております。いずれできましたら、校長さん方との話し合いは、私は定期的にしていきたいなと思いましたがけれども、今後、校長会から呼んでいただけたら参加をしようと思っていますので、お呼びかけがなかったら私から押しかけていく気もありませんし、必要もないであろうと考えています。

今日、手元に緊急で配らせていただいている高田商業のこの表を見たことがある方おられますか。ないですか。高田商業のことをまとめて、秘書課で作ってもらっています。まず、私これを参考にしたいのは男女のバランス、そして、高田商業は1学年200人の生徒で、こんなところから来ていただいているというのは市長として非常に気になりますので、いつもこれをしっかりと見ています。毎年悲しいのは、生徒598人のうち138人しか高田市民がいないこと。率にして23%。これが30%にならないかなという気がいつもしています。そして、学校の方向性といいますか、昔は読み書きそろばん、就職の市商と言われたんですけども、今は明らかに進学の方に進んでいます。ニーズに合った授業をしていただいています。そして、次のページ、実はこれ、平成15年からつけていただいています、記載しきれないので平成15年、16年は削除されました。実は3級、1級を3種目以上持っている人、平成15年から10人前後でした。僕は市長になって2年目に校長さんに来ていただいて、今のままでしたら責任持って市商を潰させてもらいます、私は卒業生ですし、教育長は市商の校長ですので、このペアの間に責任を持って市商を潰しますよと校長に言わせてもらいました。回避する方法は、光り輝く学校になっていただくことです。高田商業として普通の、どこにでもある商業高校ですという位置づけでしたら、もう大和高田市には要りませんし、持ちかねてますということをはっきり言わせていただいて、何が一番望みですかと聞いたんです。校長に何が望みですかと。そしたら、臨時職員、アルバイトの先生が多過ぎますと。先生を雇ってほしいと言われました。分かりました。私は雇いますということで、一度に全ては雇いませんでしたけど、3人とか2人とか、毎年足していって、今では特別な教科で臨時職員の方はおられますが、学級担任にアルバイトの先生がいるということは、市商はなくなりました。私が市長になったときは、多分3分の1ぐらいの先生が臨時職員の先生でした。それを交換条件にしましたので、その校長が先生方の会議で、市長に潰すと言われた。光り輝かない学校になったら遠慮なく潰す、卒業生の1人として私は断言すると言われたということ、全部私がしゃべったことを先生の会議、職員会議で全部言ったらいいです。そして、どうも先生方が、何くそ思っていたのか、目の色が変わったのか、光り輝くというのを3つにしようということで、検定を増やしていこうということ、そして、休まない生徒をつくっていこうということ、スポーツを一生懸命やろうと。この3つの柱でやっていきますということをどうも決められたみたいで、それが平成17年から、数字を読みますけども、33名が今では、平成27年7月31日現在で、これ、3種目ですので、3年生、卒業時にということですので191名いてるということは、200人中191名、2年の生徒も混ざっていますが、200人中という考え方やから90数%まで3種目とれるような学校になってきました。

そして、スポーツは、皆様ご存じのように頑張ってくれていますし、何が変わってきたかというのは、行く大学が変わってきました。中途半端な生徒やったら、中途半端な高校へ行ったら中途半端な大学しか行けません。市商へ行ったら、ベスト10、ベスト20ぐらいまでに入ったら関関同立へ行けますし、どこでも行けますよというような学校に変わってきましたので、大学への最短距離として市商を選ぶ生徒が増えてきましたので、今では200人の募集で300人ぐらいの生徒が受けてくれて100人ぐらいが滑るような学校になってきました。これは自慢で言っているのではなく、やってくれたなという形を数字であらわして皆さん方に見ていただきたい。市商はできたというのだけは分かっていたいただきたい。そういう思いでこの数字を出してもらいました。臨時職員さんが学級担任をしていた学校で、

若い先生方の正職員を毎年少しずつ送り込むことによって、先生方に大変刺激になったらしいです。負けていられない、私たちは見られてる。かっこ悪いところを見せられないというのがだんだん普及していった、若い子を入れていただけるということはいいことだという話を中間ぐらいの先生からよく聞きました。私達かっこ悪くてサボってられないというふうな学校になっていったみたいです。生徒に皆出席しなさい、休むなという以上、先生方も必死で休まない先生になってきました。出張へ行くときでも一旦学校へ行って出張へ行きますとか、5時までには滑り込むような出張の仕方をしていって、生徒の前でそれを言える自分の実績をつくるというので先生方も変わってくれました。

そういう面で、私は成功事例の1つとして高田商業がこの12年間で大きく、先生方の努力で、生徒の努力で変わったという事実だけ皆さん方にわかっていたいただきたいなど。これを小学校、中学校でしてくださいと言っているわけではありません。こういうことができるという事実があるのですから、どういう形で、どう努力すれば結果としてあらわれてくるのかというのをこの会議でしっかりと、もちろん最終的には各学校の校長、知・徳・体、バランスのとれた人間形成、育み、育てる教育ですので、偏った賢い生徒を育てるとか、そういう思いはありません。バランスのとれた人間形成、いかに時代に合った生徒をしっかりとつくっていくかというのが最終目標ですので、職員みんなに言いたいのは、もちろん立場上、責任問題もあるし、冒険とか新しいチャレンジというのには危険が伴いますし、結果は予測以上に悪い結果が出ることもあるけれども、何も仕掛けていかなかったら何も変わらない。どこかで変えましょう。

そして、今まで私は8年間、皆さんに強いてきたのは、財政が悪いので辛抱してほしいということは言ってきました。どうもそれが職員さんの中で慢性化しまして、言いわけに、財政が悪いのでというのを言いわけの1つの大きな切り口として使うような職員さんが増えてきました。これは私の反省点であります。学校教育の現場でも高田市は財政が悪いのでというような、もしそういう答えで、実は校長さんがある保護者にそういうことを言ったという事実を聞きましたので、そんなところまで高田市の財政、悪いのかというような、それを言いわけの理由に使われているんだなというのを聞きましたので、反省方々、もう高田市は財政を理由にできることをできないとは言いません。できることはできますし、前へ行くこともできますので。特に教育というのは、私は就任以来、精いっぱい力を入れようとしていたところですので、案があれば大いに乗っていきたいと考えていますので、よろしくお願いをしたいと思います。委員の皆さんにも積極的に、こんなことを言うと財政的に大丈夫かなという心配をしていただかなくてももう結構ですので、できる範囲はやっていきこうという思いを持っていますので、よろしくお願いをします。以上です。

(司会：澤井課長)

ありがとうございました。

続きまして、2つ目の議題、教育大綱の策定について、教育総務課のほうから説明をさせていただきます。

(巽課長)

それでは、事務局のほうからご説明申し上げます。お手元の資料をごらんください。

教育大綱の基本理念、「元気な高田 誇れる高田の実現をめざした教育」、2、教育大綱の基本目標、基本理念に基づき、以下の6つの目標の実現を図ります。

(1) 未来を担う子どもたちの学力向上をめざした教育の推進。

確かな学力の向上、豊かな人間性、たくましい心身等、これら知・徳・体のバランスのとれた幼児・児童・生徒の育成と個々を生かす教育を推進します。

主な関連事業といたしまして、総合学習事業、横断的・総合的な学習を週2時間、実施いたしております。また、外国語講師派遣事業、小中学校において、より行っております。

また、特色ある園づくり、親子栽培活動、老人会との交流、また、特別支援教育の指導力向上、学力・体力向上、規範意識の確立のため、基本的生活習慣の見直しを実践いたしております。

(2) 安全で安心して学べる教育環境の形成。

学校・園の特性と教育効果や未来のまちづくり等を考慮し、施設・設備の充実・改善に努めます。情報化社会に対応するため、コンピューター等のICT機器の充実に努め、情報活用能力等の育成から学力向上につないでいきます。また、学校を中心に家庭・地域と連携して、子どもたちへの食育の推進を図ります。

主な関連事業といたしまして、学校ICT環境整備事業、小中学校の耐震補強工事、中学校給食実施、障害児等対策施設整備、具体的には、菅原小学校エレベーター設置、児童ホームの新築、浮孔児童ホームでございます。

(3) 青少年健全育成の推進。

人権尊重と平等の精神のもとに豊かな人間性を育み、自立していくために、学校・家庭・地域・関係機関が一体となって、いじめや不登校等の課題に適切に対応し、青少年一人一人の個性を大切に健全な育成環境の整備に取り組みます。

主な関連事業といたしまして、人権教育の推進、各小学校に1名人権教育推進教員を配置いたしております。畝傍夜間中学就学者への補助、適応指導教室(かたらい教室)でございます。青少年指導員並びに補導員活動事業、家族ふれあい事業などでございます。

(4) 多様なニーズに応えられる生涯学習機会の充実。

心豊かでよりよい人生を過ごすため、幼児期から高齢者世代まで生涯にわたって主体的に学習を継続できる環境づくりに取り組みます。

主な関連事業といたしまして、中央公民館等における定期講座、各種教室の開催、図書館への指定管理者制度の導入、社会教育団体の育成並びにネットワーク化の推進、また、学校地域パートナーシップ事業などでございます。

(5) 芸術・文化と歴史を守り、未来へつなぐまちづくりの推進。

地域に伝わる伝統行事や歴史財産を守るとともに、これらを活用した学習機会の充実に努め、地域に対する誇りや郷土愛の高揚に取り組みます。また、さざんかホール等を中心とした各種文化芸術鑑賞や文化活動発表会を開催し、心豊かなまちづくりにつなげます。

主な関連事業といたしまして、さざんかホール自主事業並びにアウトリーチ事業、市民劇団『さざんか』による公演、奈良県無形民俗文化財『奥田の蓮取り行事』の支援、『大和高田歴史文化セミナー』の開催、文化財保護事業(発掘、保存管理)等でございます。

(6) 活力ある生涯スポーツの振興。

健康・体力づくり推進や競技スポーツの振興を図るため、スポーツ教室やスポーツ大会を開催します。また、誰もが気軽に参加できるスポーツ行事を開催し、市民の健康増進と生涯スポーツの啓発に取り組みます。

主な関連事業としまして、各種スポーツ教室の実施、各種スポーツ大会の開催でございます。以上でございます。

(司会：澤井課長)

教育大綱については、今年度、この教育会議の中でいろんな議論をいただきまして市長が策定するという事になっております。

本日は、教育大綱の基本理念と教育大綱の基本目標、これを(1)から(6)までという分け方をさせていただきまして、今現在、この(1)から(6)までの中でやっている事業、教育委員会の事業を含めまして説明をさせていただきました。これはあくまでも教育大綱の基本理念、それから基本目標というもののたたき台として今回ご協議、ご質疑いただく内容でございますので、教育大綱をつくっていく中で既存の事業以外にも新しい事業を、こういうものやっていたらどうかというような意見をあわせまして、皆様のご

意見をいただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

現在、既存の事業としてやっております事業を先ほど異課長のほうから説明させていただきましたけれども、現行の事業の改善点、それから問題点、課題等などもございましたら、よろしくご意見をいただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

(吉村委員長)

大綱ということから考えたら、ある程度の対象の期間というのが多分想定されると思いますが、それが、例えば3、4年になるのか、4、5年になるのか、その辺のところははっきりわからないわけですが、どうしても総花的といいますか、全ての項目がずっと挙がってくる。これを、例えば学校現場で言いましたら、指導目標、学校の目標を見ても、あるいは県の目標を見ても、大体全てのことが網羅されている。だから、大綱という性格からすれば、それはやむを得ないことではないかと思っておりますが、じゃ、具体的に、先ほど市長のほうで教育に力を入れるという心強いお言葉をいただきましたが、じゃ、ここを、例えば3、4年は、大和高田は、特にこのことについて重点的に人をつぎ込んだり、お金を使おうではないかというようなことができないのかなと。そういうことの共通理解ができて、そういう短いスパンの目標を具体的に重点目標的なものを挙げて、その重点目標も、よくある幾つもの重点目標じゃなしに、ある程度ポイントを絞ったようなものを重点目標にしたような大綱ができないのか。あるいは大綱としては、そういうところは私はわかりませんので、思いだけをちょっと述べさせてもらいました。

(司会：澤井課長)

一応、国の教育振興基本計画、こちらのほうが国でつくっておられるものなんですが、こちらの計画期間が5年ということになっておりますので、とりあえずといいますか、この年度内に市のほうでつくる計画についても4、5年程度ということ想定しております。どの項目にどのようなことに重点を置くかということですが、私、感じておりますのは、これは教育委員会のほうでも協議させていただいて、市長、委員さんとも協議させていただかなくてはならないのですが、1回目の会議、2回目の、先ほどの皆様の説明、意見、校長先生との意見交換会の中で、やはり学力の向上、体力の向上、それから、それらを高めるためには家庭教育も重要だと。家庭環境というのが学力等の向上に大きく影響を及ぼしているというようなことをよく聞いたと思います。記憶に残っておりますので、私も個人的な意見を述べさせていただく場ではないのですが、そういうところにやはり力を入れていかなければならないのかなと感じております。

(村井委員)

それをするために、どこをどうされるのですか。それをしようとするなら、具体的にどうやればいいと思われませんか。

(司会：澤井課長)

学力、体力向上等ですね。やはり、実際にどういう授業をしていくかというのは、各教育委員会、市長の指示を受けまして市としてやっていくべきなのですが、やはりまず、この間の校長先生とのいろんなお話の中で、まず、いろんな家庭環境もありますが、基本的に勉強ができる場、体力の向上ができる場というのを親御さんも一緒に、地域の方とも連携のとれるような、そういう環境を整えて学力向上、体力向上を目指した授業をしていくというようなことなのかなと思いますので、まず、教育環境を整備していくということが重要ではないかと思っております。

(村井委員)

例えば、学力向上の中で先ほど、外国人講師派遣事業のことがありましたが、外国人の講師を呼んで週に1回なりやっていますけど、実際のところほとんど意味がないですよ。英語をあれで話ができるようになるなんてとてもできないし、やるのだったら毎日呼んでやらないと、たとえ10分でも20分でも毎日やらないと、一応英語をやっていますよというだけに過ぎないので、これでとてもじゃないけど英語なんてしゃべれるわけじゃない。実際、どういう方法でやるのかということです。例えばコンピュータを書いていますけど、奈良県で、例えば日本で一番大和高田市はコンピュータをたくさん入れてくれるというのであれば、そういうことを具体的に。いろいろこれもやります、これもやりますといっても、とてもじゃないけどできないので、だから、大和高田市はここがずば抜けていますよと、他の市や県に比べて、何か絞らないと。これ、毎年教育委員会の中で出ていますけど、あまりにも漠然と書き過ぎて、何もかもが全て重点事項、これは誰でもわかることです。この中で一体どれに力を入れて、どれをやるのかということ、具体策がないとわかりませんし、できないと思います。

(吉田市長)

去年の12月に、IT教育推進で3億5,000万円の補正予算を組んでやってきて、そのときにタブレットの数とか、決めるときに県平均とか、いろんな数字を出しながらやってきましたよね。そのときの資料などは、教育委員さんには見ていただいているのですか。

(寺井事務局長)

細かいそのような資料、数字は、教育委員さんのほうにはお示ししていなかったと思います。

(吉田市長)

去年、実は私、やめる気でいました。次には出ないという強い決心をしていたので、何を残そうかということと考えたときに、教育、最後にしっかりとやろうかなと思って、何で4月の新年度予算で組まないのかと言われることを覚悟で、12月補正で、選挙前に出していったら選挙狙いだと、また違うようにとられるだろうなど。12月にやっつけてしまえということで3億いくらか、あれ。タブレットの数とか、かなり踏み込んで、他市のバランスを大きく上回っていると思いますが。そういう資料がもしあったら出していただきたい。この間話し合いをしたときにあったと思いますが。まずそれを考えてやっていこうということで、今、同時発信で、タブレットが来てからどう使うかということ、学校現場で考えているのでは遅いから、来る前から計画をちゃんとつくって来るのを待ってますと、こういう形で使いたいということですを教育現場でしっかり話し合いをしながら、タブレットが来るのを待ってますというようにしてほしいということで12月中に、いや、8月、夏休み中に工事を終えるという計画で進んでいるのでよいですね。

(寺井事務局長)

はい。

(吉田市長)

もう1つ、教育現場と意見が違ったのが、少人数学級をやってほしいと。あと8人ですか。

(中本参事)

6クラス。

(吉田市長)

6クラスですか。

(中本参事)

はい。

(吉田市長)

少人数学級になっていないのは、高田市の小学校であと6クラスだけなんです。おおむねどころか、大方自然発生的に少人数学級になっているんです。あと6人さえ先生を入れたら全て少人数学級になりますよというところまで高田市は少子が進んでます。で、えいやでやっていこうかなという話で現場からは今年の新年度予算に入れてくださいという要望が来たんです。そしたら、教育委員会事務局が言っている、ITが遅れています。よし、前へ行きましょう。次、少人数学級、まだ完全実施してるところってないですね、あるのかな。少人数学級で完全実施している市、ありますか。

(中本参事)

ないですね。

(吉田市長)

奈良県ではないですね。それをやった場合、高田市でやったら、もう6人でいい、高田市は。あと6人の先生。それをやった場合、私、結果を求めますよと現場に言いました。これで教育委員会事務局が言っていることを全てパーフェクトにこっちののんだら、結果をどう出してくれるのか。少人数学級にしたら生徒の学力は上がります、IT遅れています、高田市は少ししか、各部屋に1台しかありません、せめて6人に1台ぐらい当たるようにしてください。みんな要望をのんで、私がしたときに、学校現場、これ、大変ですよと。私、奈良県で1番を求めますよ。そうでしょう。要望として上がってくるものを、これをやったら成績上がりますというものを2つも実施したら、ある程度もう実施できています。あと残ってる、市長として教育現場へ働きかけができるのは少人数学級やと思っています。どこでやるかというのは判断しようと思ってるんですが、これ、一緒にやったとき。だから、話した、ITを先に実施しよう。これをどれだけ活用して、それを直接学力の向上につなげてくれるのかしっかり見ようと。ですので、もうそれこそ、近々しようと思ったら、少人数学級はできますよ。高田市の今の形で進んでいったら。そのときに結果、出せるだけの先生方の意気込みと計画と、そして信念があるのかと、私は問わないと決断はできないと思っています。ですので、私、校長会へ行かせてほしい、行かせてほしいとずっと言っています。これをすれば、打てば響くのかなと。打っても響かないようなところへ、高田市の税金ですので、結果を求めますよという、この言葉が一方的に上から物を言っているようにとられるかどうか、私らの経済感覚で育てる人間から言いますと当たり前の話です。投資に対して結果、イコールで出していただかないと、普通。こちらの原則から言いますと。それを教育で求めたらいけないと思うけれども、それは責任として受けとめてもらわないと困ります。

ですので、教育委員会会議で、できるだけ早い時間に少人数学級してくださいと言われるのですから、本当に1年、2年で、これはできると思います、高田市で。そのときに、本当にそれを、IT化しました、少人数学級にしましたといったときに、学校現場はそれをどう受けとめてくれるのか。「あっ、そうですか」で流されたら困ります。

(村井委員)

やはり教育委員長とも話をしましたが、先生方は我々教育委員ですらも、今、市長がおっしゃったことは理解してない。これだけ先生の数を増やしてもらっている、ITを入れてもらっているのだから、どこの多分先生も認識がないと思います。

(吉村委員長)

今、市長の言葉を聞いてちょっと驚いたのは、大きなズレがあると思うんですね。例えば、我々は学校訪問へ行くと、各教室、全部見て行きます。そのときに、IT機器が大和高田は進んでいるかといったときに、実際の使っている姿を我々は見て判断するわけです。その場合に、大変増えたなというような思いはないんです。

(吉田市長)

この6月、いや、8月。8月に、夏休み中にオンラインで学校を全部つなぎます。教育委員会にも端末を置いて、学校現場とも直接パソコンで指示、命令、情報をできますよ。教育現場では、教室に何台でしたか。

(寺井局長)

基本的に生徒用のコンピュータの入れかえが、全部で435台入れかえます。それは、小学校で315台、中学校で120台となっています。それプラス、先生用のコンピュータの配置もします。

(吉村委員長)

1人1台。

(寺井事務局長)

はい。340台。

(吉田市長)

多分県下で一番今、現状であったら台数は多くなっておると思います。タブレット、6人に1つとかですね。

(寺井事務局長)

タブレットのほうは、小中学校、各学校18台、全部で198台入れるようにしています。

(吉田市長)

各クラスで6台ずつですか、何か言っていましたね、何台ですか。

(寺井事務局長)

各学校18台ですので、クラスで、6学年ですと3台、中学校で……。

(吉田市長)

1年生からタブレットを使うのですか。

(寺井事務局長)

そうです、はい。全学年です。

(田口委員)

タブレットで何ををするのですか。

(寺井事務局長)

タブレットを使って、タブレット用の教材を使って学習をします。

(田口委員)

タブレットは家庭に既にあつて、タブレット自体、パソコンも各1台あつて、タブレットも今は多分10台ぐらいあるわけですよね。それをどう使うのか。

(吉田市長)

それを私も言いました。来てからどう使うとか言わないでください。どういう教育現場でこれをどう活用して、どう使用するというのは今から考え進めてほしいと言いましたね。

(中本参事)

学校訪問で、陵西小学校で去年、今年も、教室でタブレットを使った、あれが1つのモデルということで、あれを先生方が研修で福岡市に去年、今年と行って、こういうことが今後教育の中でできるという、学校訪問で見させていただいた。

(吉村委員長)

そこは確かに見ましたよ。ところが、例えば、デジタル黒板があるじゃないですか。あれの使用頻度なんかはどうですか。

(中本参事)

デジタル黒板は、ほんとに今学校にありませんので、今、ある学校で。

(吉村委員長)

メインというのが、この場で聞くのはおかしいですけど、メインは、いわゆるタブレットを使うということをメインにしているということですか。

(中本参事)

今、教室にインターネット環境がありませんので、今回の工事で教室でインターネットが使えるということになります。陵西小学校の場合は特別に、それに向かっていくだろうということですので、ああいう模範授業といいますか、模擬授業をしてもらうことによって、今後、こういうことができますというのを教育委員さんに見いただきましたし、先生方にも陵西小学校へ研修に行ってください、今、その準備をさせていただいていると。まず、インターネット環境が教室でできるというのが1つ大きな、そのことによってタブレットが無線で使えるということが1つ大きなことと、あと、先生方に校務用パソコンが1人1台、葛城市はもう早くからされていますが、そのことによって業務の、今まででしたら職員会議で提案するのを印刷して、とじてしてたのが、簡単にパソコンに提案文書を流すことによってそれぞれ1台、職員会議の効率化ということもできますし、学校間の先生方のメールのやりとりも、そういうこともできていくというような大きな変化といいますか、9月からはできていくだろうということ。

(吉村委員長)

ということは、来年の4月、5月、6月の学校訪問のときには、そういう状態が見れるということですか。

(中本参事)

そういうことが考えられると思います。

(吉田市長)

電子黒板は。

(寺井事務局長)

それもしています。

(吉田市長)

今はないけれども。

(寺井事務局長)

はい。9月には、各学校6台設置します。

(吉田市長)

12月に、今期でやめる予定をしていましたので、これみよがしにどーんとやって、その情報すら流れてないと言われると、厳しいです。委員さん方。電子黒板も、授業のときに先生方の利便性が上がりましたとか、通信もできました、教育インターネットというのは普通のインターネットと違って、教科書に合った、そういう先生方がおっしゃる赤本みたいなものが自動的に先に出てくるものですか。それは、先生方が使うのですか、子供たちが使えるのですか。

(中本参事)

子供たちも使えます。社会の調べ学習などでしたら、今まで図書館に行って本を調べたりもしてましたが、教室でそれがすぐに歴史の、例えば人物を調べましようといったときに、先生方がここを開いてみましょうと言ったときにすぐに。今まででしたら図書館で本で調べる、コンピュータ室へ行って調べるというのは今までも見ていただいていたと思いますが、それが教室でできるようになるかなと思います。これが、今は社会の例でしたけど、算数にしてもそういうことができていこうというところで。

(田口委員)

そうなると、この会議の目的というか、今のような一つ一つの施策に対して討論していくのか、いわゆる総合会議として理念であるとか、大綱を策定して、それに対して主な施策を落としていって、具体的な施策はこうであるとか。それに対してまた大綱に戻っていき、こういうものをつくり上げていくというふうに認識していますが、その辺りはどうなんですか。

(司会：澤井課長)

今年度はまず、教育大綱の策定というのが年度内の策定義務がございますので、大綱については第2期につくるときに現行の教育大綱の中での施策を評価して2期目の大綱をつくる必要がございます。そのほかには、これは必要な場合に市長が招集するという形になるんですけども、例えば学校でいじめの事件が起きたと。その結果、お子さんが、例えば自殺をされてしまったとなれば、それは緊急事項になりますので、この会議の中で。

(田口委員)

この会議としては、トップダウンで緊急的なものを開くという、この意味合いについてはわかっているんです。今回、この初期、1、2回においては、ある期間に大綱を決めなさいと。これは国のほうから決められている方式もあると。これに基づいて大枠を決めて、それに対して具体的にどういうことをやっていくと。そして、今度は重点事項としてはどういうふうに大綱の中に優先順位をつけて、今後はこのような事業をすると教育委員会として、こういう順番の話をするんですか。

(司会：澤井課長)

そうですね。国の教育振興基本計画というものを参酌して定めなさいというふうになっております。あくまでも基本理念、それから基本目標をまず書くということで、例えばこの1番から6番までの中で、この目標を実現するためにこういうことをやっていきますというような細かい施策を書けというものではございません。あくまでも大きな議論、それと基本目標を掲げていくという形になります。

(田口委員)

そうすると、こちらのほうとしては、総花的なイメージしか浮かばないという、委員長がおっしゃったように、今、言葉で言っていただいた具体的な施策というのがほとんど記載はされてなかったんですけども、その辺も言っていただいたらというところで、全体の体系図みたいなものがないと、それに対する具体的なコメントはいいよと、これでオーケーだからもうちょっと下げようかというのは、頭の中ではわからなくはないのですが、ある程度具体的なものも見ながら、大綱的な目標、理念みたいなものにも戻ると、こういうふうな順番でないと、どちらかという現場サイドで見ている僕たちにとっては具体的な、例えば一つ一つの施策に対してどうだという話を、特に市長がいらしていただいているので、例えば予算的なもの、あるいは人事的なものを含めて話してしまうということになってくるんですけども、それでいいんでしょうか。

(司会：澤井課長)

いいと思います。当然予算の執行とかはまた別の話になってきますけども。

(吉田市長)

さっき私が朝から言っていたことと同じことを言っています。理念の後ろに現状があって、足らずとしたらどういうものをつけ加えていくのか、どこを重点でやっていくのかというのが、その人に見えていなければ、ここでつくった理念というのはお題目だけで実効性がないものを議論してくれと言われても議論のしようがない。正しいことばかり拾い出して書いてあるものを、ここへ文句をつける人なんかいるわけがない。

(司会：澤井課長)

さっき、異課長のほうから、個々にどんな事業をやっていますというふうな説明がありましたけれども、本来はそれの、この(1)から(6)までの中の項目別に、こういうことを事業をやっていますと。いつからというのが。

(吉田市長)

それはあなたが、さっき見せた理念関係、前から3つ書いていますよ、3列に書いていますよ。その後ろにいろんな意見を集約したことを書いていきますよ。そして、実行と。つけ加えないといけないもの、重点目標をこっちに書いていって、1つに仕上げますと。それはしっかりと1つだけ出してくれたって、今、2、3を見せてこういうことをやって

いますというのも結果として、今の教育の結果でしょう。だから、後はどこに重点を置くのかというのは、今やっているのと言って、足らず、つけ加えるものというのが議論になっていくでしょう。そうことを言うておられる。

(司会：澤井課長)

そう、わかります。市長に午前中に、総合戦略の中で入らせていただいたときに、基本方針と具体的施策ですか、基本、3つ、欄がありまして、ここまではこの教育大綱で定める内容と思っています。市長には、今日、朝からお見せした資料については、具体的施策、基本理念の下に、事業の項目と、その項目の中でやっているものを紙に書いてあったんですね。

(吉田市長)

それはまち・ひと・しごとの創生法に基づく総合戦略という会議の資料なんですけど、あの考え方で進まない。言っていたでしょう。これを議論しなさいと言われても、意見が言えない、誰も。間違ったことが書いてないですから。ご無理ごもつともですと、みんなそれしか意見が言えない。

(司会：澤井課長)

本来は、先ほど(1)から(6)までの間で、現在、こういう事業を教育委員会のほうでやっていますという説明が口頭ではあったんですが、今回は一覧表がなくて。

(吉田市長)

あれをつくって、ある程度の自分らの評価もそこに書いて、評価を自分らで、ここはもっと重点でやっていきたいとか、こういうことに対して、例えば生徒の反応は低いとか、ある程度の現実合った現状を見せてくれて、1の事案に対して、現状があって、今後どうするということを語れと言われてたら、皆さんしゃべっていただけるけれどもこれでは議論できません。

1個だけ議論を言うけど、地域で育てるとか、地域で子育てするとか、教育は学校現場と地域をもってとか、最近、私、その言葉で学校も逃げてるし、保護者も逃げてるし、みんな逃げて、置き去りにされてるのは子供だけだという気がします、自分の子供って親の100%責任だと思います。学校は義務教育でどれだけその子にしっかりと教育というサポートをしてあげられるのか。地域はその後ろでいろんな意味で危ないところをきれいにするとか、けがでもしないようにいつでも掃除するとか、みんなサポート側です。ですから、みんなが逃げていっているの、本質の議論というのはできない。地域で育てましようと言われた段階で、親が逃げてるように思えます。地域と言われても、家庭教育があって、学校教育があって、地域はその次でしょうと。みんな当たり前。そしたら地域で育てましようという言葉で学校も助かってるし、親も助かってるし、地域も助かってるし、一番苦労してるのは本人です。そんな言葉で。という気がします。

もちろんそんな議論をやったところで教育改革にはならないと思いますが、家庭教育の大切さ、せめてそこがあって学校へ行って机の前に座る子がいて先生が教えようがないでしょう。それで、親は目上の人の言うことを聞きなさい、先生って名前がついてある人は、先に生まれた偉い人なので話を聞きなさい。せめてそこぐらいまでは家庭教育が、1足す1は2、2足す2を覚えてきてもらうこともいいけれども、せめて人との接し方ぐらいは家庭の中ででき上がった生徒が小学校へ来るというのが最低限度してもらわないと、学校現場でできないと思います。そこから教えることなんて。その辺からしっかりと、将来を見て、責任を持って、高田市の教育、タブーかも知れませんが、そんなこと言ったら国に逆らうことになるのか知りませんが、地域で育てるとか言われたときにいつも疑問

に感じます。使いやすい言葉やし、みんなが使います。みんな責任の所在があやふやになっていると思います。地域とともにやったらわかるけど、地域で育てるとか書いてあるときに、私は、親はあなたでしようと言いたいです。

(萱澤委員)

やはり挨拶ができない子が増えています。うちの子、挨拶しないんですって先生に文句を言う親がいる。私はそれ、おかしいでしょうって。やはり挨拶って家庭でちゃんと親が挨拶して、それを子供が見て挨拶するべきものであるし、やはり子供たちに親、近所の方でもおはようと言ったら、子供たちにおはようと返すように教えるのも親。学校の先生ではないと思っています。

(村井委員)

挨拶を教えるのは先生じゃなくて親でしょう。

(萱澤委員)

親です。

(吉田市長)

そういう意見がある会議で出ていました。誰か出席していなかったかな。若い先生が挨拶しないみたいな。家の前を歩いていかれる先生方が、若い先生が挨拶しないと。そんな先生が何を教えるんやろうと。大笑いですと、そういう話がありました。

(村井委員)

コンピュータを入れていただけということと、もう入ってくるわけですから、それで人員も増やしていただいているということであれば、それは先生は今後、当然やらざるを得ないと思いますよ。

(吉田市長)

まだ人員を増やすというのは、少人数学級を全部増やす、もう6学級ぐらいやったら、今、大分入っていますよね。

(中本参事)

小学校は各校1人、教育推進教員、先ほどの事業の説明がありましたけど、人権教育で各小学校に1名ずつは入っていますね。あと、中学校は臨時で、非常勤で。教科は各学校違いますけども、何時間ずつか入れていただいています。

(村井委員)

でも、高田西中学校なんかはできないと言ってましたからね。教科担任、習熟度ができない、人が足らなくて。はっきり言うて、校長先生がおっしゃってました。

(吉田市長)

そうですね。九九を知らない中学生がいるのでどのようにして教えるか。その議論、ある校長が振ったとき、私、小学校の先生が反論すると思っていました。あんまり意見が出ないので、私から、振りました。中学校の校長からとんでもない意見が出ましたと。九九を知らない中学生が小学校から上がってきますと。小学校の先生達は、そう言われたとき、校長さん、何か反論ないですかと。それで、捉え方というのは、議論しているときに、議論してるのは、やっぱりある程度の中間、最大公約数のこれを議論しているのであって、

それ以下の人、それ以上の人、少数人数のことを今表へ出して言いわけの理由にするというのは議論できていない。おおむねここをどう上げていこうかという議論をしているときに、学校へも来ない子に教えようありませんと言われてたら、それは特別な部類に入る人でしょう。その層をどうしましょうかというのは別で議論しましょうよ。今、教育を上げようというのは、ある程度の力の20%ぐらいから上の90%までをおおむね見るのでしたら、特別賢い子、中学校から違う学校へ行きますという子が入っておったら、いい学校へ行ってくださいねとみんなで送ってあげたらいいのであって、下の10%、20%ぐらいの人をみんなで学校としてどう組むのか。担任の先生が1人で抱え込む問題と違って、ある一定のラインに達していない環境の生徒をどうするのかというのは学校全体で議論して、みんなで対応していかないという形をつくったら、担任の先生が本業というか、真ん中、センターを忘れて、それにかかりっきりですという、そのようなことは、あり得ない議論です。それで、管理職はその人に0%から100%まで、全部担任の管理ですよって、このような形をつくったたら、今、緊急にハードな問題をクリアしにいかなければ、その人に全部、0%や100%でかけたら、その人は20%から90%までですよ。下の20%はみんなで、学校単位で、また学年単位でもいいですが。学校単位でもいい。みんなで協議して、みんなで当たりましょうよ。そしたらその個々の先生を守ることもなるし、いい結果に結びつく確率はずっとこれよりあると思います。

#### (中本参事)

実際そうやって低学力傾向の子供の取り組みというのは、学校訪問でも各学校でお話をいただいていると思いますが、今はやっぱりチームで取り組むというのが、今、市長がおっしゃったように、やっぱり学校や学年や、そういうのがありますので、低学力傾向の子供の把握と、そして、その子にどういう学習体制を組むかというのは、少人数学級で2つに割るという方法や、その1つの学級に先生が2人入って、その子を重点的に救うという体制、それから、放課後の補習学習とかそういう、そこはかなり各学校ではしていただいているとは思いますが。しかし、なかなか定着しない子供もいますので、そこを学校現場が今苦しんでいるというのが実情ではないかなと思います。

少人数学級は、先ほど6名と言いましたけど、これは小学校だけでありまして、中学校現場は、今、35人を超えている学年がほとんどですので、中学校現場はもうひとつ厳しい部分であるかもわかりませんので、まず小学校からということで、去年は6人どうかなりませんかというお願いには行ったんですが、小学校で言いますと、全国学力状況調査の成績を見ていただくと、ほぼ平均かちょっと上ぐらい、またそれを上回っている学校も小学校現場ではかなり定着してきているのではないかと。ただ、中学校現場ではかなり成績が厳しいというところで、中学校現場も何とかありませんかというのはまたお願いにはしているかと思うんですが、なかなかそこまでは。

#### (吉村委員長)

中学校現場での厳しさというのは我々もわかるわけですけども、教育委員として現場なりにかなり要求しているのが、単なる少人数ではなしに、いわゆる習熟度別ですよ。これはもう大分長くかかって、ようやく中学校で若干動き出した。効果的に上げるためには習熟度がいい。それからもっと言えば、これも前から意見が出てます小学校でのある程度の教科別の指導の取り入れですね。だから、そういう面にも我々はやっぱり言及していかないと、単に先生をもらって2つに分けました。対象人数が半分になりました。これだけでは具体的な効果というのはなかなか出てこないという調査もあるじゃないですか。だから、僕たちはやはりずっと習熟度でやってほしいということで現場に働きかけをしている。だから、同じ人、人的なものをいただくのであれば、やはり市としてもそういう方向で我々が要望しているということを知っていただきたいなという思いはあるんですよ。なかなか

か現場が難しくいろいろな問題がある。だけど、実際に市内の中学校で始められたところは、その問題をほとんどクリアしています。だから、そういう実態も見てますのでね。これからいただく人的なものは、やはりそういうふうに使いたいなという思いがしています。

(村井委員)

習熟度は大分よくなってきてますね。教科担任は、なかなか小学校も全然動きがないみたいやから、いくら言ってもやってくれない感じですけど、ただ、市長もさっきおっしゃられたように、それは思う以上に低学力の子供が多いですね。特に、あまり学校の名前を直接は出せませんが、やはり低学力、昔は上の子がいて下の子がいてですけど、その下の子がやっぱり多いですね。それはやっぱり家庭的に大きな問題をいっぱい抱えている家庭があって、だから、小学校でも学校に来ないし。

(吉田市長)

ついていけないということですか。

(村井委員)

学校に来ないです。

(吉田市長)

そのような数字、何%とかありますか？

(村井委員)

とある小学校から中学校へ行ったら、その中学校は学力が悪いのは目に見えてます。模擬テストをやっても極端に低いですわ。だって、下がグーっと引っ張りますよ。0点と100点でしたら平均50点ですから。

(吉田市長)

その学年があるというわけですか。

(村井委員)

ある学校ではそんな感じですよ。上げようとするれば、そこを上げない限りは上がらないかもわかりませんがね。真ん中ぐらいからみんな塾へ行ったりして、そこそこやってるから、そこそこの点はとっていると思いますけど、そこから下が、学校にも来ないし。

(吉田市長)

そのような生徒は何%でしょうか。先生、教えてください。

(中本参事)

具体的な数字は、ちょっと何とも言えないですけど。

(吉田市長)

20%、30%というような数字が出るか。そこまで行ったら大変やと思うけど。

(中本参事)

そこまでは。

(村井委員)

ものすごく点数が低いですから。

(中本参事)

もう少し少ないとは思いますが。

(村井委員)

平均点が10点近く低いんですから。そんなの、あり得ませんよ。1点、2点、低いだけでも、1点、2点だけでも大変ですからね、平均点ですから。5点低いと言ったら強烈ですよ。そんなの、とてつもないぐらい。

(吉田市長)

小学校の先生は、小学校の教育、教えられますという試験を通して、国家試験で教育というか、専門は何々とか、あるのですか。

(中本参事)

教員になってから、各教科の研究団体がありますので、たまたま学校の校内で、例えば国語の担当になったときに、その教科の研究会の出張に行ったり、研修に行ったり、その中でそれが専門になる先生もおられることはおられますし、特にこれというのではなくて、例えば生徒指導とか、人間形成とか、そういうところでご活躍いただく先生もいますので。

(吉田市長)

小学校の先生はおおむね5教科を平均以上、ちゃんと教えることができますよという、特にこれが専門ですという、そういう決め方ではないわけですね。

(中本参事)

そうですね、はい。

(萱澤委員)

よろしいですか。実は私、小学校のときは教科担任でした。

(村井委員)

西宮でしょう。

(吉田市長)

小学校でも教科担任をしているのですか。

(萱澤委員)

はい。私、大分前ですけどね。

(村井委員)

でも、普通考えたら、どうしても先生って、オールマイティーじゃなくて得手不得手があると思うんです。文系と理系に大体分かれるから。だから、本来なら算数と国語ぐらいは小学校でも教科担任にしていったほうが。

(萱澤委員)

そうでした。教科担任で算数は算数の先生、理科は理科、国語は国語の先生で、ちゃん

と先生がかわって授業を。

(中本参事)

過去、僕も陵西小学校で、学年だけの教科担任制をしたことがありますが、基本的に時数が合わないと、同じ時間数で取り合いをしないと、誰もいないところがあるので、同じ時数の教科で取り合いをします。例えば理科2時間、社会2時間、そうすると、隣のクラスと時間割も合わさないといけないので、かなり時間割の作成から苦勞したのは覚えてます。ただ、部分的な教科担任制はしたことを覚えてますので。ただ、利点としては教材研究が、社会をして理科をしなくてもいいというような、そういう利点はありましたけど、かなり複雑な校内体制でしたので、全学年するというのはなかなか難しかったです。

(村井委員)

全教科を思っているわけじゃなくて、算数と国語だけ。

(中本参事)

算数と国語の時数が合ってませんので、国語8時間、算数が5時間ですので、小学校の場合、週の。学年によって違いますが、国語を全部とったら算数5時間と、あと3時間何かをとるとか。書写の時間、図書の時間もその中には含まれますので、そういう時間割の、そこへ特別教室の配当も入ってきますので、かなり複雑でしたのはでしたけど。

(吉田市長)

基本理念のところで「元気な高田 誇れる高田」って、これ、違う言葉で置きかえてください。これはやっぱりまがりなりにも政治家ですから、教育の理念ですかと言われたら、この言葉は政治的な言葉ですので、「実現をめざした教育」、教育の私物化に当たります。ですので、これは変えてください。

(寺井事務局長)

はい。

(吉田市長)

違う意味で、次代を担うとか、次の、そのような言葉で。やっぱり教育理念としてふさわしい言葉に置きかえてください。

(村井委員)

教科担任にこだわっているようですけど、どうしても子供と先生って、人間というのは合う合わないというのが絶対あって、同じ先生に全教科を教えてもらって、合う子供はいけど、合わない子は全然合わないわけです。最低国語と算数だけでも入れかわれば、この子と合わないけど、この子と合うとか、確率がね。若干助かる面もあるから、やろうと思えばやれなことはないと思うんです。要は、はなからやる気がない、小学校の先生は。ずっと、十何年言い続けている。全くする気がないです。

(中本参事)

村井委員さんが言われるように、確かに、合わないから教科担任制をしたわけじゃなくて、学年の子を全員で見ていこうという理念のもとに、ほかのクラスにも行くことによってそのクラスの子供も知ることができるという、そういう利点のもとにちょっと複雑な教科担任制をしたけども、おっしゃるとおり、確かにそういう面では。

(村井委員)

そういう意見もあると、保護者の意見からしたら、大体あの先生に当たって嫌やわというのは結構ありますよ。

(萱澤委員)

ほんとうに低学年はそんなにないと思いますが、やはり5、6年になったら、子供たちも気持ちも大人になってきますので、村井さんのおっしゃるように、先生がかわったら子供たちが勉強を頑張ろうという気持ちになるかもわからないというのは現実かなと思います。

(中本参事)

ただ、ちょっとしたトラブルがあったときに、自分が他のクラスに行かなければならないとなったときに、やはり小学校は一日その子供を見てますから、親との信頼関係の中で、今日一日こんなことがありましたという話をするときに、やっぱり小学校の利点は、一日1人の教員が、また学年所属の先生が見ているということが保護者の信頼関係が成り立っているところがありますので、あまり教科担任制を全部してしまうと、逆に担任が何も把握していないという部分では難しいところもありましたけど。小学校はやっぱり1人の持っている授業時間数が多いです。小学校の担任は、週28時間、フルに持っています、担任をしています。中学校の教科担任制は、1人、16、7、20時間以内です。ですから、その辺で教科担任制をしても生徒指導面でもすぐ走っていけるというのがありますが、小学校は全部、時間割が、簡単に言えば詰まってしまうので、いわゆる空き時間というのは音楽ぐらいですから、1、2年生は専科はいませんので、ほぼ25時間ぐらいは1人の担任が全部見ていると思います。

(吉村委員長)

ここで意見を闘わず場ではないと思いますが、例えば習熟度別の学習のときでもそうでした。できない理由をたくさん言われるんです。それは、実際やってみたら、しなければならないと思ってやったら克服できるんです。現実には今の中学校はそうでしょう。3中学校とは言いません。3つともそろってませんから。1校はまだじっとされてますからね。やられたところは克服したんです。だから、例えばですよ、小学校の教科別指導が高学年である程度有効だという前提に共通認識できるのでしたら、それをやるためにはどう工夫したらいいかというのを考えるのが我々教育委員じゃないかと思います。できない理由は幾らでも、今おっしゃるとおりです。時間割1つでも大変です。でも、現実にはその大変な中でやっておられる学校なんて、高学年に限定して、しかも国語とか算数に限定すればいくらかもあるんです。だから、大和高田市ができないわけではないんですよ。だから、そういう発想で我々はこれからいかないと、現場のしんどさはわかっているつもりなんです。だから、参事がおっしゃっている意味もよくわかりますけれども、発想をもうちょっと変えないとだめなのではないかという思いがします。

(中本参事)

今のはハード面でのちょっと課題を言わせてもらいましたが、やはり先ほどからも出ていますように、家庭的な環境要因がベースにあり、やっぱり学力を上げようと思ったら、落ちついて学習に取り組めるというのが大事で、それが一番ベースにあるのかなと。それがやはり、管理ができる学年、かなり厳しい学年もありますので、できないことはないと思いますが、そういうこともちょっと加味すると、やっぱり学校現場でそういう討論を、議論を含めながらやってみようかなという学校は出てくるかもわかりませんので。

(田口委員)

逆の視点から言うと、例えば今、それをやっているということは何を指しているんですかという。例えば、ここで言う1番にかかわってくる。この文章から、これが目的になり得ないですね。例えば、今の注力しながらみんなの底上げをするのか、みんなに教育をしてもらい、全ての人に100%ということからすれば、また今の話に戻っていくと。そうすると、戻っていくとどうなるかという、どんなことをしてもそれを実現しなきゃならないという1つの方向性が出てくるということですね。いろいろな問題というのを一つ一つ、あるんじゃないかとそれを潰していこうと次のアクションプランが出てくるということで、そういうところからいくと、今現状にあることの問題点から、それを指していることをもう少し先ほどみたいにして、この言葉を大和高田の言葉としてもうちょっと変えていく。今のことが現場サイドでは大きな問題が起こっているということを、より、それでもやっていこうというようなものを大前提のトップの文言があるというところに共通項を持っていったほうがいいんじゃないかというふうに、もちろんまた違う意見、見方なんですけども。もちろん基本理念って、もうちょっとキャッチフレーズで皆さんに、大和高田の市民にわかりやすいような言葉にさせていただいたらいいかなと思います。

(村井委員)

コンピュータも入れてもらって、人もうまくいけば増やしていただける可能性もあるとして、もし少し増やしていただいたら、これは、何が何でも上げなかったら話にならない。これですみませんなんて、そんなこと絶対に通らない話でしょう。

(吉田市長)

一旦増やしたら、5年に1回買い替えの時期で毎回、今回3億5,000万円ですから、5年で入れかえというのをやっていったら、めちゃめちゃな金額になるんです。4年間は私がしないといけないから、次の買いかえは私の間で来る。本当に1つのこっちから学校側へのメッセージですから。今まで十二分にできなかった点をしっかりとこちらがフォローしましょうというメッセージですからしっかりと受けとめてもらって、次は村井さんが言っている、習熟度というのか、そして、最終的には少人数学級の実現というのが次の目標として見えてきたので、そこへどう組み立てていって、私が言っているのは、一方通行では困ると。現場で結果も見せてもらいながら受けとめ側の責任もちゃんと果たしてもらって次のステージ、次のステージへ今後は行きたいという気がする。それは議論が先、やっぱりこれに対して現状こういうことをやっています、そして、これに対してこういう評価で、こういう結果は現状であらわれていますというのをつくってくれたら、理念と現状を見たときに足らずとか、重点とかいう話の議論になっていく、真ん中が今、1枚抜けているから、これはなかなか議論にならないです。実際にどういう形でアクションプランをステージごとに緊急性、重要性で順番に並べていくというのは次の議論になる。

(司会：澤井課長)

それでは、とりあえずこの会議の中で議論いただくために、今、教育としてこういう事業をやっていますというのを、この(1)から(6)までの体系に合わせて、一覧でまづつくったものを、その中で自己評価の部分と課題点みたいなものがありましたら記して、それを一度一覧としてこの会議の中でごらんいただくという形にさせて、次回もそういう形でいけたらという形でもよろしいですか。

(吉田市長)

ITの件について、予算化したある程度の説明と、それを学校現場でこの8月以降、ど

ういう授業の中で、どういうふうな活用を考えてますというのをセットでつくりましょう。そっちはそっちでこっちはこっちで去年の9月の資料を引っ張り出して、もう一遍整理して、わかりやすく、数字を抜き出して、そのようなものをつくってください。

(田口委員)

希望ですけど、教育総合会議、教育委員会自体がICT化をしたほうが早いかなと。それは情報共有であるとか、プライバシーも含めて、この中でそれを使うのか、その辺も考えたほうが情報共有できて全部わかるので。

(吉田市長)

今は議論を絞って言っているのに、準備不足と言うと失礼ですが、資料不足で議論にならないというのが現実ですから、私が、今朝、想定していきましょう。言ったとおりでしょう。議論にならないよと。みなさんもごもっとも承られると、私が今日言ってたでしょ。こんな言葉で突っ込みを言ってもしょうがないから。朝から議論したように、職員ですら10年前の数字が頭の中に入っていて、高田市の現状を理解していない職員がいてということは、現場サイドがこういうふうに変ってきました、こういうふうな、今、数字ですという情報発信、庁内ですら情報発信ができていない。市民はさらに分かるわけがない。そうでしょう。市民に教育について熱心に協力してほしいと。発信もしていないのに協力してくださいって、市役所内でもできていないのですから。

実はある会議で、義務教育に、幼稚園、保育所から小学校に入るときに引っ越しをしてよそへ行く人がたくさんおられますという議論になったことがあります。私は、今、そんな数字見たことないから、数字があるのであれば見せてほしいと。その人は、児童手当の事務を何年前に担当していたのでその数字がありますという話になった、教育委員会事務局で今年のをつくってほしいと言って今年のものをつくってもらいました。実は彼が10年以上前の数字を覚えているのかどうかは知りませんが、3人しか変わっていません。幼稚園、保育所から小学校へ入るときに実際変わったのは3人で、実際には13人減って2人増えています。その13人も市内の公立、市内の私立、養護学校、その他インターナショナルスクール13人というのがあっての人数ですので、実際に高田が嫌で小学校へ行くときに、これをきっしょによそへ転居しようとしたのは3人。それを、何%もあるように議論をする。

(土谷教育長)

ちょっとそのデータ、いただいている中で、若干私どもの数字とずれてきているところがございます。

(吉田市長)

何で、これも違うのですか。

(土谷教育長)

私どもはどうしても3月から4月、4月の入学というところで見ているんですけども、その方が持っておられたデータをちょっと見せてもらいましたら、年間通じてどの時期ということじゃなく、動いておられて、人数的に何人動いたか、年代層で動いたかという数字の動きを持っているんです。その20代から、大体40代前半ぐらいのところでごそと動くときに子供も一緒に動いたという、そんなデータもちょっと見せていただいて、ちょっとその辺、もうちょっと詰めなきゃならない部分がある。

(吉田市長)

それもしっかりつけてください。次は、中学校に行くのが1つのポイントですので、そんなときに動くのかどうか。数字を拾い出してください。

(司会：澤井課長)

寺井局長、教育委員会のほうで取りまとめ、各課の分、資料として取りまとめしていただけますか。

(寺井事務局長)

現状の結果、評価的なものですね。

(司会：澤井課長)

そうです。

(寺井事務局長)

それはできますけど。

(司会：澤井課長)

お願いします。

ちょっと資料不足、説明不足で不細工な会議になってしましまして申しわけございません。今度、11月ぐらいに教育委員会が開催されるということなんですが、ちょっと今日の分が、進まないという結果になってしまいましたので、ちょっと11月の時期よりも前の10月ぐらいの時期で、一度またこの総合教育会議でお集まりいただくというようなスケジュール調整をさせていただきたいと思います。次回の会議につきましては、いろんな意見をいただきましたものを資料としてご提案させていただいて、その中で協議していただくと、ご意見をいただくということにさせていただきたいと思います。

(吉田市長)

提案ですけども、市Pの三役さんぐらい声をかけていただくのはどうでしょうか。PTA協議会という高田市全体のPTAの会議があります。そのうちの1人か2人、三役さんで声をかけてもらうというのは、あまり直接の保護者がおられたら言いにくい面もあるのでしょうか。

(村井委員)

よほど日程調整しないと、昔のPTAとは違いまして、みんなサラリーマンで、くじ引きでなったみたいな感じの人も結構おられて、夜しかできない、日曜しかできないとかになってくると思いますね。

(吉田市長)

ここに一緒に入っていて、喧々譁々の議論をしたいなと私は思っているので、議題によって、必要に応じて、私は呼んでくださいと言ったら呼んでくれることはできるんですか。招集、私ですよ。では、そういう形でさせていただきます。

(司会：澤井課長)

それではこれで終わります。

また、後ほどスケジュール調整のほう、させていただきますので、よろしく申し上げます。本日は、ありがとうございました。

閉 会 午後4時45分